

NEWSLETTER

編集・発行 日本催眠医学心理学会

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル 2階

(株)毎日学術フォーラム内 TEL. 03-6267-4550

No. 55 2009. 10. 26

日本催眠医学心理学会の発展を祈って

飯森 洋史

(日本催眠医学心理学会

第55回大会 大会準備委員長)

日本催眠医学心理学会第55回大会が、いよいよ迫って参りました。米国より、Carolyn L. Daich 先生を招聘し、情動調整と催眠について理解を深めようと企画致しました。まず、初日に Daich 先生による特別ワークショップ行いますが、中級者を中心に募集したため、やや集まりが悪いような気がします。折角の機会ですので、初級者にも解り易いようお願い致しましたのでどんどんお申し込み下さい。お蔭様で、催眠技法研修会には多数のお申し込みがあり満員御礼で御座います。

テーマに合わせて、Daich 先生に基調講演を、河野良和先生に「感情コントロールと自己催眠」についての教育講演を、西条先生には情動発現の脳内機構についてのランチョンセミナーをお願い致しました。シンポジウムでは櫻井先生と川嶋先生からパニック障害について話題を、仁木先生からは背景にはトラウマや埋もれたトラウマ、耐え難い記憶や経験が存在する不安障害患者の催眠について話題を提供して頂く予定です。

一般講演では田中新正先生からパニック障害の事例が、私からは、怒りの情動調整の事例が出されます。研修会での事例検討でも上手先生から不安障害についての事例を出して頂く予定です。

また、今回は斎藤稔正先生からは「催眠によるペインコントロール」のランチョンセミナーを、一般演題でも水谷みゆき先生からは「慢性痛に対する催眠」について、安達友紀先生から「催眠による認知的評価の変化と痛みの耐性」についての話題を提供して頂き、痛みと催眠についての話題も本大会のサブテーマとなりました。

更に、川村則行先生には「研究デザインの組み方」の教育講演をお願いしました。催眠の実験的研究に関するシンポジウムでは、徳田英次先生からは「催眠実験の構造と論理」について、三上一治先生からは「催眠誘発喘息」について、福土審先生からは「催眠を用いた過敏性腸症候群の研究」についての話題を提供して頂く予定です。この催眠の実験的研究についても、本大会のもう一つのサブテーマになりました。

懇親会では、ファミローザハーモニーという素晴らしい音楽集団の演奏会を企画できましたが、残念ながら参加人数がまだまだ足りません。参加されましたら、音楽浴によりトランス空間へ導かれ、必ずやご満足されると思いますので、宜しくお願い致します。当日参加でも、事前申し込みと同一料金とする予定です。

最後になりましたが、その他の一般演題には様々な角度からの御発表が予定されています。学会を盛り上げる為に演題をご提出頂いた方々には、この場を借りて御礼申し上げます。

猶、大会を準備するにあたり再認識したことがあります。学会で研修は受けるが、臨床では使っていない先生方が余りに多いことです。どうか、学会終了後も忘れないうちに細々でも良いですから使ってください。催眠を愛する人間の一人としてお願い致します。

学会・研修会参加印象記

アメリカ心理学会年次大会印象記

窪田 文子 (いわき明星大学心理学科)

去る8月6日から9日にかけて、カナダのトロントでアメリカ心理学会の第117回年次大会が開催されました。カナダでアメリカの学会の大会が開かれるというのも不思議に感じられるかもしれませんが、トロントは五大湖のひとつであるオンタリオ湖に面しており、ヒューロン湖を挟んで隣がミシガン州という所で、アメリカとの国境に位置しています。地理的にも文化的にもアメリカに近く、アメリカ人にとってトロントはアメリカの延長ととらえている人も少なくないと思います。2001年9月の同時テロ事件までは、国境での検問も緩やかでパスポート確認も形式的なものだったようで、口頭での申告で済ませられる場合も多かったようです。しかし、その後警備も厳しくなり、大会案内には、Don't forget to bring your passport という注意書きが添えられていました。

大会は木曜日から日曜日までの4日間にわたり、木曜日から土曜日までは朝7時から午後10時まで、最終日の日曜日は午後2時までさまざまなプログラムが途切れなくスケジュールされていました。プログラムの内容は、全体的な企画として、オープニング・セッション、会長企画プログラム、全体セッション、そして、今年初めて企画された convention within the convention と題された10のテーマにそってまとめられたセッションで構成され、それらと並行して56の各部会が企画したシンポジウムやワークショップ、ポスター発表で構成されています。

これらのスケジュールを載せている大会プログラム集は電話帳ほどの厚さがあり、これに目を通してどこでどのようなセッションが開かれているかを見ていたのでは相当な時間がかかるでしょう。私は、関心を持っている部会（催眠研究や臨床研究法）の企画を中心に見ていくことにしています。この領域に関する部会としては、第30部会の心理学的催眠部会 society of psychological hypnosis、第12部会の臨床心理学部会 society of clinical psychology、第17部会のカウンセリング心理学部会 society of counseling psychology、そして第29部会の心理療法部会 psychotherapy があります。大体これらの部会の企画に目を通して、どのセッションに出ようか計画を立てています。また、今年は convention within the convention の10のテーマのうちの一つが実証的臨床実践 evidence-based practice だった

ので、今回はこのテーマに関連したセッションにも出てみました。

オープニング・セッションは初日の6時から行われ、今年は、学会の最高の荣誉である功労賞がアラン・カズディン Alan Kazdin, Ph.D. とパトリック・デレオン Patrick DeLeon, Ph.D. (両者とも学会長を経験) に送られました。基調講演は、遺伝子研究の専門家であるフランシス・コリンズ Francis Collins, Ph.D. が予定されていましたが、オバマ政権で重責を担う予定になっており、その任命式がすむまでは公的な場への出席が禁止されているということで、急遽心理学者であり下院議員である方に変更されました。それらのまじめなセレモニーの後、トロントを拠点に活動する民族音楽の人気バンドが音楽を披露し、国際色豊かな都市としてのトロントの雰囲気を出し、お祭りムードを盛り上げました。学会の会長や功労賞受賞者らをはじめ、ほぼ会場全体が音楽に合わせてからだを動かし、楽しい雰囲気に包まれました。さすがに、楽しみ方を心得ているアメリカ人ならではの企画だと思いました。

催眠研究の部会では、これは昨年のことですが、シンポジウムの中で、催眠の社会認知的理論の中心的な存在で、非状態派の立場をとるアーヴィン・カーシュ Irving Kirsh, Ph.D. が、MRI などの脳の活動をリアルタイムで測定する機器を用いた脳研究によって、催眠時には特定の脳の状態が観察されることが明らかになり、催眠という特定の状態の存在を認めざるを得ないと述べました。これは、催眠理論の歴史の上で大きな展開の一つではなかったかと思いました。今年のシンポジウムで印象に残ったのは、更年期のさまざまな症状を軽減するために催眠を応用しているグループの発表があり、NIMH (National Institute of Mental Health) からの研究費を得て大規模な研究がすすめられているということでした。

実証に基づく臨床実践のテーマに関するセッションでは、現在第12部会（臨床心理学部会）が中心となつてまとめた実証的臨床実践 (psychological treatment) についての歴史的経緯や現在の基準が話題とされ、実践研究について参考になりました。これに関しては www.psychologicaltreatment.org で詳細を見ることができます。

また、会場ではAPAの出版物をはじめ心理学関連書籍の出版社が書籍やDVDを販売し、授業で活用できそうな図書やDVDを探すのに大変好都合です。

次の第118回年次大会は、2010年8月12日から15日にカリフォルニア州のサンディエゴで予定されています。忙殺されている日常から少し離れて、心理学や臨床実践について改めて考える機会になった数日間でした。

The Evolution of Psychotherapy はここがすごい

徳田 英次 (桐蔭横浜大学)

2005年にエリクソン財団のThe Evolution of Psychotherapyに参加した。今回2009年大会は12月に開かれるが、残念ながら参加することができない。近いうちにこのニューズレターで参加された方の大会印象記を読めるものと期待している。私の参加体験はもうだいぶ前のことになってしまったが、この大会での体験は他では味わえない貴重な体験として今でも強い印象を残している。この大会のどこがすごいのか、日本で同じようなことができるだろうか、日本の学会に活かせるものはあるかと考えてみた。

<桁違いの規模と質>

アメリカであるからこそ世界中から人を集められるのかもしれない。規模としては日本心理学会や日本心理臨床学会と比べられるかもしれないが、それらの発表者がすべて世界レベルの大御所になったようなものである。ほんとうに幅広い流派から大御所が集まってきている。この規模と質を実現することは世界中でこの大会以外には不可能だと思う。

大会がこれだけの規模を創り上げ維持しているのは、何よりも第一回大会の成功が決定的であろう。第一回大会の記録を元に編集され邦訳された誠信書房の「21世紀の心理療法」の解説に、当代諸学派の最も代表的な治療者たちが一堂に会したが、これだけの大御所たちがこのように顔を揃えることは今後ないであろうと書かれている。しかしこの大会の成功が大御所たちにも集まる意義を見出さしめたのだろう、その後の大会でも第一回大会に負けないような規模と質を維持している。第一回の大会の成功は、そこにはいなかったミルトン・エリクソンという巨人の偉大な業績であると思う。実践の人エリクソンのケースを前にして理論的な立場から異を唱える人は想像できない。エリクソンの名前が冠されていたからこそ、大御所たちは理論対立的にはなく、実践的で生産的に集まることができたのではないと思う。この歴史と規模と質は、どんな大会も真似ができそうにない。やはり行くしかない。

<いい意味でのショーマンシップ>

これだけの規模で幅広い流派からの大御所が来ているので、参加者は大御所たちの夢の対決、夢のコラボレーションを見ることができる。いい意味でまさにショーである。第一回大会のようなピリピリとした熱気はもうないのかもしれないが、それでも参加者が見たい対決、見たいコラ

ボレーションがこれでもかと用意され、大御所たち自身も楽しんでいるように見える。理論的に相容れないだろうなという人も同席し、一つのトピックをめぐる、かみ合ったり、かみ合わなかったりしながら意見を述べている。この熱気にあてられて、参加者同士も、誰はすごいとか誰はつまらないとか、どの発言はよかったとか悪かったとか、あちこちで意見交換している。会場を巻き込んだショーはやはりこの国独自のものか。

また討論やライブスーパービジョン、ライブセッションを中心としたプログラムなので、理論だけでは分からない生の実践の雰囲気を知ることができる。本で読んだ大御所たちの姿や立ち振る舞いを見るとまた新たな興味がわく。例えば私は、それまでゲシュタルトセラピーという「グロリアと三人のセラピスト」のフリッツ・パールズのセッションしか知らなかった。アーヴィン・ポルスターが舞台上でセッションしているのを見て、一目でそのスタイルが気に入って、理論とはまた別に自分にあったスタイルというのを考えて勉強するキッカケになった。今は催眠の技法をそのスタイルにうまく取り入れるのが自分の臨床の目標になっている。

<いい意味で商魂たくましい>

大会のプログラムはすべて映像か音声で記録されている。閉会式が終わって帰るときには、ほとんどのプログラムの記録をCD-ROMやDVDとして購入することができるし、後で郵送してもらうこともできる。商魂たくましいと感じるとともに、誰にとっても非常に有益で合理的だと感心する。ずっと後になって学会誌で文字の記録を読むのは迫力が違う。大会の規模が大きすぎてすべてのセッションに参加することはできないので、生で見られなかったプログラムを見ることができるこのサービスは、本当にありがたい。英語では理解のおぼつかなかった場面も、DVDで繰り返し見れば何を言っているのかがだいたい分かるので、生で見た体験を生かしつつ、理解もすすむ。費用の問題や許可の問題など、解決すべき課題は多いだろうが、このやり方はぜひ日本の学会や研修会でも導入を検討してほしい。

以上、特徴的な部分だけを何点か振り返ってみた。あらためてあの体験をふりかえてみて、やはりあの体験はあそこでもしか味わえないかと再認識した。今回の2009年大会にも仕事の都合をつけて行けばよかったと今更ながら悔やまれる。次回大会には万難を排して参加しようと思つた気持ちを新たにしている次第である。

第16回 国際催眠学会印象記

清水 貴裕 (秋田大学教育文化学部)

標題の学会への参加はすでに5年も前の話になるのですが、ニューズレター担当者から依頼を受けましたので、記憶にある範囲で当時の大会について振り返ってみたいと思います。

第16回国際催眠学会(大会会長:オーストラリア、Graham Burrow氏)は、2004年10月17日から22日までシンガポールで開催され、鈴木常元先生(現駒澤大学)、徳田英次先生(現桐蔭横浜大学)とともに参加しました。当初、当大会は2003年に予定されていたようなのですが、SARSの影響で1年開催が遅れ、開催地もシンガポールとタイのプーケット島が予定されていたものが、シンガポールだけになったという経緯があるようです。それも影響しているのかもしれないのですが、参加者は総勢100名弱程度のとてもこぢんまりとした大会でした。しかし、そのせいもあって、お互い誰にでも話しかけられるような雰囲気のあるアットホームな大会だったと思います。

大会は、サンテック・シンガポール国際会議場で行われました。大会プログラムは、初日がWelcome Party、18日からの3日間がワークショップ、20日にCongress Dinner、21日からの2日間が講演と一般演題というように構成されていました。

私が参加したワークショップの中では、ハンガリーのBányai 女氏(当時の国際催眠学会会長)の話が一番記憶に残っています。ご自身が入院したときの体験から、病院の中で患者を「患者」として扱う様々な関わりや言葉がけがネガティブな暗示として働いていると述べておられました。Alert Hypnosisで著名な方ですが、今もなお、そうした自身の体験を通して催眠について考えているということに感銘を受けたことを覚えています。

私自身は一般演題で、“Experiential Scorings for the Japanese Version of the Harvard Group Scale of Hypnotic Susceptibility, Form A and the Waterloo-Stanford Group C scale”というタイトルで研究発表を行いました。発表順が午前の一番目で、フロアにいる人も大変少なかったのですが、それでも初めての国際学会での口頭発表ということでも緊張しており、ただでさえ不得意な英語がさらにボロボロで、さんざんな発表でした。発表後に座長から肩を叩かれ、「気にするな」というようなフォローをされたことを覚えています。そんな研究発表でしたが、それでも発表が終わった後は、喫煙所などで何人かの人から声を

かけられ、名刺交換などもできたので、少しは発表したかいたがあったのかもしれない。

他の参加者の発表でとてもインパクトがあったのは、トルコから参加された方の発表で、催眠下で子宮摘出手術を行ったというものでした。その内容も日本ではまずあり得ないのですが、手術の様子を動画で流しながらの発表だったのには大変驚きました。たしかその動画のせいで発表時間がかなり超過していたはずなのですが、映像に圧倒されたか、発表後はなぜかフロアから拍手が起きていました。

こうした日本ではありえないような催眠研究や実践の見聞きや、自分の発表での苦い経験などはこの大会に参加したことの収穫のひとつでしたが、私の中で一番の収穫だったのは、論文でしかお目にかかることのない人々と実際に交流することができたことだと思います。自分の発表の前日にあったCongress Dinnerでは、アメリカのDavid Spiegel氏の隣の席に座り、fMRIやPETを用いたご自身の研究の様子について教えていただくことができました。反対に日本での研究の様子も聞かれ、「日本の心理学研究者は研究資金が少なく、なかなかfMRIのような機材は使えない」というような話をしたのですが、なかなか信じてもらえませんでした。Congress Dinnerにはその他にも多くの著名人が参加しており、そうした人々を間近に見て話が聞けるといのは私にとって論文や本の中だけで存在していた人々の人間的な面を知り、身近に感じられる体験でした。

国際催眠学会ではこうした貴重な体験をたくさん得ることができて、もっと研究も英語も頑張らないといけないとモチベーションを高めて帰国したことを、この原稿を書きながら思い出しました。日々の仕事の忙しさから少し忘れかけていたのですが、また気持ちを新たにして努力をし、国際催眠学会で発表のリベンジも果たしたいと思います。ちなみに今年の9月には第18回国際催眠学会がローマで行われており、斎藤稔正先生がご出席されたとうかがっています。斎藤先生からそのときの様子を拝聴できるのが今から楽しみです。

催眠技法研修会参加印象記

—研修会に参加前と参加後—

佐藤 欣也 (北福島医療センター)

日本催眠医学心理学会という学会を見かけたのはもう15年近く前と思われる。

東京の麻酔関係の学会出席の際、隣で開催されていたのを見に行ったところ、もう終わってしまったのか、もぬけの殻でした。それから今回までのお初の研修参加まで

くるのに私の紆余曲折の時間は長いものになりました。今回のタイミングまで自分の中ではそこに至る時間が必要だったからかもしれません。催眠と麻酔はかなり特殊な領域という観点では似ていると思われま。かなりの経験を積んで初めてわかることもある世界だと思えます。ですから今回の研修会は、わたしにとってかなり熱のはいたものになりました。

私は、麻酔とペインクリニックが専門になりましたが、医師になって10年間の麻酔領域ではストレスに見合った麻酔量が必要という科学の中で過ごしてまいりました。ペインクリニックにおいても交感神経が活発になっているからなど細分化された研究結果からブロックや服薬を中心とした加療で過ごしてきた感があります。しかし、なにか足りないものがある気がしているんな学会（睡眠学会、スポーツ医、労働衛生コンサルタント会、日本温泉物理研究会、漢方医学）に参加して雑学を吸収してきたつもりでした。ところが、医師10年目にしてベルギーのリージュ大学で催眠麻酔をしていることを知り、上司のついで1カ月半研修させていただいたところ今までの先に述べた認識は簡単に吹っ飛び今までの麻酔は一体何だったんだという認識にたたされてしまったのです。私の目に飛び込んできたのはホメオパシーではないかというぐら少量の麻酔の量（1/20程度それも導入時のみの量）と患者との会話で全身麻酔が行われている現実でした。外来では、痛みの患者をトランス状態において自己解決できるような自我を再構築させるような自己暗示であり、まったくブロックや投薬は必要とされませんでした。脳の機能検査であるスペクトルでは聞く側頭葉の反応と夢や物をみている時に反応する後頭葉がかなり強く反応しているのが確認されました。今までの医療行為に対し、かなり内省するような内容を解釈するため習ってきた呼吸法と会話による日本式催眠麻酔法はないものかと手探り状態から開始することとなりました。外人と違って日本人は少し、周りの状況確認を大事にする民族意識があると思われました。麻酔では患者さまと初めてお会いするか術前回診でお会いするだけなので、麻酔をかける10分ぐらいで仲良くなる必要があります。毎回どうしたら手術前で緊張していらっしゃる患者さんに話を聞いてもらえるかの練習から始めて今回までできました。ですから今回の研修会での催眠の基本がラポール形成にあるというのはすごく実感できたことでした。

研修会は一から学ぶつもりで参加させて頂くつもりでしたが、担当者の長谷川さんに実践研究コースを進めて頂きました。ですから基本的知識には欠けるものの、講師の先生の誘導がいいのか、はたまた実際にラポール形成に苦

労したせいかすんなり終わることができてこのコースで良かったと実感しております。これからもこのような実践的コースの開催で一人でも多くの催眠療法士？ができ、またその一人になりたいと思っておりますので講師の皆様方今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

委員会報告

企画・教育委員会、研究委員会

委員長

松木 繁（鹿児島大学）

先ず、今年度の活動報告ですが、学会主催研修会は一昨年に続き、年2回のペースで行っています。さらに昨年度に続き、日本心理臨床学会第28回大会春季ワークショップ（代表 田中新正先生）において臨床心理士対象に催眠療法の研修が行われ大変な盛況でした。また、各地区での研修会も盛んに行われています。

企画内容については、今年度も昨年に引き続き「催眠の臨床適用」、「催眠の実験・基礎研究」、「催眠実践の倫理」という3つのテーマを中心に掲げて企画を考えてきました。

既に、今年度、第一回目の研修は、7月26日(日)に大阪大学吹田キャンパスにおいて開催され、約70名参加を得て盛会裏に終了しました。この研修会においても、研修企画には研究委員会との合同提案で出された「催眠の実験・基礎研究」コースを設け、催眠の実験研究の促進を図るための試みを続けています。ただ、残念なことに、まだまだ参加者が少ない現状があります。わが国の催眠の実験・基礎研究の発展を願うと、さらなる研修企画の工夫が必要なかと考えさせられています。

一方、「催眠の臨床適用」についての企画も、多くの会員からの「催眠誘導はできるようになったがそれを実際に適用する具体的な方法の研修を受けたい」という声に応える形で実際の臨床場面に即したテーマで研修内容を組み立ててもらえるように講師の先生方にはお願いしています。しかし、多くの受講者を対象にした研修会ではどうしても“シュミレーション”型の研修しか組みようがないため、会員からは臨床の臨場感の乏しさを訴える意見も聞かれたようです。今後、可能ならば、臨床場面のビデオを使った実践的な研修を組み立てるなどの工夫を行おうかとも考えています。ただ、こうした方法では、さまざまな点で、患者（クライアント）や治療者（セラピスト）に対

するリスク管理が必要になるため慎重に検討していきたいと考えています。

さらに、「催眠実践の倫理」については、研修の活性化が進む時こそ最も重要なテーマとして研修会においても強調してきました。「催眠による危険の要因は催眠にあるのではなく、催眠者にあることがあきらか」なので、「催眠者の適性として催眠技法、心理療法についての基礎、対象とする疾患についての専門知識、人格などが問われねばならない」(高石, 2000)という言葉は今後も研修会で強く訴えていきたいと思えます。この言葉は、催眠実践上だけでなく、研修会そのもののあり方にもあてはまることです。そうした意味では、研修会においても研修参加者の「安心・安全」が守られるような配慮を研修委員会としても行っていきたいと考えています。学会主催以外の各地区での研修会の開催も増える中で、こうした点での学会全体の組織的なリスク管理が必要と考えられますので、今後の重要課題として取り組んでいきたいと考えています。

この後、11月21日(土)に学会大会時での技法研修会が東洋学園大学本郷キャンパスにおいて行われます。最終ページに、21年度の今後の研修予定をあげておきますので奮ってご参加下さい。

最後に研究委員会ですが、先にも書きましたように、研修会では必ず実証研究コースを設けて、今後の催眠研究の発展に寄与できる人材を育成する機会になればと考えています。そのための資金確保の手助けになればと、学会からの研究補助金制度を設けるべく制度案の作成に尽力しているところです。

国際交流委員会

委員長

長谷川 明弘(金沢工業大学)

国際交流委員会は、海外の学術団体や研修会に関する情報を含めた国際的な動向について本会の会員との橋渡しを担当しております。

本委員会の活動報告ですが、窪田文子先生(いわき明星大学)が2008年8月14日から17日に米国ボストン、2009年8月6日から9日にかけてカナダのトロントで開催されたAmerian Psychological Association(アメリカ心理学会)の年次大会、また2008年11月初旬にフランスのパリであったInternational body psychotherapy conferenceにとそれぞれ参加されました。それらの中から1番新鮮な話題としてカナダ・トロントでのアメリカ心理学会の第117

回年次大会の参加体験記を窪田先生からニューズレター上で報告をしていただく予定です。また2009年11月20日から23日に東京文京区にある東洋学園大学で開催される第55回大会において国際交流委員でもある宮田敬一理事長(大阪大学)が海外からの講師招聘への協力をされ、情動調整(Affect Regulation)で著名なCarolyn Daitch先生が初来日されることになっています。まもなく本学会の年次大会ですので、多くの方のご参加を期待しております。

本稿執筆時点で2009年9月22日から26日までイタリアのローマにて第18回International Society Hypnosisの大会が開催間近です。大会テーマは、催眠と神経科学(Hypnosis and Neurosciences: clinical implications of the new mind-body paradigms)となっており、国際交流委員の斎藤稔正先生(立命館大学)が参加されております。

今後の国際大会関連の情報ですが、2009年10月21日から25日には、The Society for Clinical and Experimental Hypnosisのワークショップと大会が米国ネバダにて開催されます。さらに第6回心理療法の発展会議(Evolution of Psychotherapy Conference)が米国カリフォルニアにて12月9日から13日に開催されます。発展会議については、時期を繰り上げて前倒しの開催であるとのことでした。

海外での各種大会ご参加される会員がいらっしゃったらご一報をお待ちしております。他にも情報や問い合わせなどございましたらいつでもhasegw_a@neptune.kanazawa-it.ac.jpまで連絡をお待ちしております。

資格認定委員会

委員長

井上 忠典(東京成徳大学)

昨年の総会、及び前号のニューズレターにおいてお伝えしてきましたとおり、学会認定資格の名称変更の必要が生じ、これまでその準備をしてきました。会員の皆様からもご意見をいただき、ありがとうございました。常任理事会等を通じて最終案を検討しているところです。今後の予定といたしましては、11月の第55回大会時に開催されます理事会及び総会において、最終的に決定することになります。従来の学会認定資格の名称は、本学会の中で歴史を刻んで来ましたので、思い入れのある会員の皆様もいらっしゃると思いますが、何卒ご了承ください。

また、学会認定資格を多くの会員の皆様に取得していただきたいと考えています。資格認定の要領に従いますと、

申請の受付期間は9月10日から12月10日となっております。基礎資格(従来の催眠技能士)を申請するために必要な要件には、正会員になって3年以上、大会への参加等の研究実績、理論10時間・実技20時間の研修実績などがあります。資料請求やお問い合わせにつきましては、下記のところまでお気軽にお問い合わせください。積極的に資格を取得していただけますよう、よろしく願いいたします。<資格取得についての連絡・問い合わせ先：井上忠典 t-inoue@tsu.ac.jp>

エッセイ

旅の仲間

松原 慎 (新日鐵八幡記念病院心療内科)

生涯で最大のギャンブルとは、人生そのものである。

自分をチップに未来を懸ける。先は、ある程度読めるが、時流の流れに翻弄されることもあれば運良く救われることもある。そこに運命を感じる者もいれば、何度も土まみれになって再起を期す者もあり、心折れる者もいる。

私にとって最初のギャンブルは、九州上陸であった。親しい人には話しているが、母親は宮城、祖母は青森と東北系の血が半分。後は織田信長配下滝川一益に焼き討ちされた伊勢の一向一揆の地元である。親戚は東京や京都にはいるものの、九州は全く縁もゆかりもない土地であった。

催眠現象の面白さに学生時代に触れて以来、催眠を学ぼうと決めたのは良いが、なかなか良い研修機会に恵まれなかった。当時は本学会が年に7時間研修しているのが唯一学術的な団体の研修であったから、民間の催眠術師に習った私には、学会の研修を受ける機会というのは垂涎的といえた。

当時学生だったので仕方ないのだが、学会の外部から眺めていると、本学会の研修は気がついた時には締切で、大変敷居が高い印象だった。現在はインターネットの活用でそこまで難しくないが、まだ当時は「パソコン通信」の時代だったのだ。アマチュア無線が有線化してやっているようなものであり、まだ各種の情報を出し入れするには通信網もパソコンのパワーもついて来なかったのだ。

そんな頃、成瀬先生の催眠面接法やら、ウォルバグの催眠分析などが医学部の生協にも並んでいた。自分の大学の精神科の医師が買う前にそういった本を購入していたように思う。調べると、心理学の巨人成瀬悟策と心身医学の巨人池見西次郎は共に九州大学で教鞭を執っていたことが分かってきた。年齢を計算したらとうに引退している

と思われたが、そのような巨人を排出していたところなのだからその弟子なり文化なりが残っているはずだと見当をつけ、九大心療内科の門を叩いた。

恥ずかしい話、三代目の教授になられていた久保千春先生のお名前は事前には全く知らなかった。アレルギーや腹八分目に医者いらずの実証など基礎的研究で世界的にも有名な方だったのだがそれを知ったのは入局後である。

研修医時代を徳洲会のERで過ごし、戻ってきた時にお会いしたのは今も相棒として親しい吉村隆之さんである。彼は「臨床」心理学を学ぶためにわざわざ北海道の大学を選び、大学院への進学は少し経験を積んでから、と若いなりにしっかりした考えを持っていた。彼の入った時の学年は今でも世界で活躍する人材の出た年で私の一級上であるが、みんなで車をツーリングして佐賀の栗山一八先生の門を叩きに行ったというパワフルぶりである。催眠に限らず、全国から久保先生を慕って集った仲間達とはとにかく心身医学を学びたいという意欲に満ちあふれていた。

そこで吉村さんは栗山先生の被験者となり、催眠の有用さを実感したわけである。思えば、栗山先生が直に教えたという意味では最後のメンバーに近いのではないだろうか。

成瀬先生やら池見先生やらというビッグネームに人生のチップを懸けたところ、そこで出会ったのは同世代の吉村さんという旅の仲間であった。彼とはその後、福岡催眠療法研究会の立ち上げをはじめ様々なプロジェクトと一緒にやっていくことになる。とがってばかりでトゲのあった私を時に素直に、時におおらかに、時にはたしなめて付き合ってくれている彼にはいつも感謝している。私は彼の素直さやおおらかさに学び、彼は私の律儀さや強迫性を取り入れて相補的に伸びていると言える。

巨匠に習うことも重要ではあるが、心折れぬためには共に歩む仲間が必要である。全く未知の土地で吉村さんという知己を得たのは、極めてありがたいことであった。

そして福岡催眠療法研究会を立ち上げた時、第1回講師をして下さった田中新正先生の縁が繋がりに繋がって上手幸治さんとも知り合うことになる。いつも個性的なファッションで楽しませてくれる人であるが、臨床センスは素晴らしく、少し先に行く目標としていつも注目している。こういう縁が出来たのも福催研設立というギャンブルの一つの結果ともいえる。

一つ一つの縁を大切にしていくことは人間同士のネットワークにとってとても重要である。経済学者の野口悠紀雄の言う「ネットワークは力である」というのはまさにこのこととも思う。

上手さん吉村さんと松木繁先生のもとに修行に行っていたことがあるが、皆180cm前後の大男で、三人揃っては

漫画の「男塾」さながらである。その上、ファッションと来たら一人は坊主頭に下駄、一人はネクタイにジャケット、一人はカジュアルとまるでバラバラな出で立ちである。松木先生に注意されたことを慰め合いながら、三人しょんぼりとつばめに乗って帰って来つつも、いつも再起を期していた。これも仲間あってこそである。

その上手さんが箱崎九大キャンパスで復活させていた院生相手の催眠研。最初は私は外部から受講させて頂いている立場だったのだが、最近は催眠技能の資格の関係もあってなんだか主の一人ようになってしまっている。最近院生の関心も非常に高く、毎回10名近い参加者が入れ替わり立ち替わり訪れる。九州大学の自由に学べる雰囲気と、催眠研に限らず、壺研、ブリーフ研、アプローチ研など色んな研究会が林立している層の厚さは得難いものとして貴重な気がする。

最近、なるべく自分の臨床能力の全てを出し切ることを心がけている。研究会などで打ち合わせなしのライブでデモンストレーションを行っていても、常にZeigのいうgift wrappingを心がけているのである。そのせいか、地元の研究会では、ロコミで参加者が増えている。やはり周りの目は確かなもので、誘導技法のレジュメを一生懸命暗

唱しようと言っていた頃は内容に深さがなかったためであろう、参加者がロコミで増え続けるということはなかった。

現在、箱崎研の中心は吉村さんに移り、上手さんと私が各回毎に交代のファシリテーターをしている。ある程度の力をつけさせて頂いたのは修行に付き合っ下された松木先生をはじめ、福催研で講師をして下さった、笠井仁先生、田嶋誠一先生、中島央先生、児島達美先生、心療内科の先輩である松原秀樹先生や荒木登茂子先生、などのお力によることも多い。

このように、九州上陸という一つのギャンブルは成功したと言え、次なる博奕の福催研設立も本学会を始め多くの貢献に繋がった。

昨年4月より私は北九州市に赴任し、北九州催眠研という新しい賭けを始めている。そこにも素晴らしい仲間が集まりつつあるが、それがどう繋がりや広がりを生んだかはまた次回話すことにしよう。最近、催眠療法の効果はどこにあるのか、ということにも関心を寄せつつあり、その仲間達の話に加え、新しい知的刺激を求めたい気持ちも高まってきた。次の55回大会では多くの諸賢と交流が持てることを期待している。

研修会情報

1. 学会主催研修会 (平成21年度)
 - 1) 平成21年度第1回学会主催研修会 (終了しました)
日時: 平成21年7月26日(日)
場所: 大阪大学
 - 2) 平成21年度第2回学会主催研修会(第55回大会)
日時: 平成21年11月21日(土)
場所: 東洋学園大学本郷キャンパス
2. 日本心理臨床学会ワークショップ (終了しました)
日時: 平成21年5月31日(日)
場所: 跡見学園女子大学文京キャンパス
3. 今後行われる予定の地区研修会(開催時期順)
 - 1) 東日本催眠療法研究会第4回研修会
日時: 平成22年1月9日(土)~10日(日)
場所: 東京医科歯科大学
 - 2) 鹿児島臨床催眠研究会第3回研修会
日時: 平成22年2月28日(日)
場所: 鹿児島大学総合教育研究棟
 - 3) 福岡催眠療法研究会第15回研修会
日時: 平成22年3月20日(金)~22日(日)
場所: 九州大学発達臨床センター

編集後記

今回は、海外情報をなるべく多く載せようという趣旨で編集を行いました。これから、海外学会に参加される方々にも、参考になる情報をお寄せいただけたと思います。また、今年の国際催眠学会や The Evolution of Psychotherapy について、ニューズレター等で、報告していただける方がいれば幸いです。それから、本号のもうひとつの趣旨は、大会へ向けて盛り上げていこうというものです。そして、大会を盛り上げるだけでなく、今後の催眠学会の発展に向けて、いろいろなアイデアが出て、それが実現されていくことを期待しています。今回のニューズレターには、執筆していただいた先生方から、盛り上げるためのヒントもいただいていると思います。ありがとうございました。広報委員会では、引き続き、会員の皆様からの情報を募集しております。次号の編集担当は日本体育大学の楠本恭久先生になります。

(編集: 鈴木常元)